

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (54)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

まずは structural linguistics の祖 F. de Saussure に言及することで論旨が展開もする Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning*(1923)の言語哲学を背景に、EP 本の元版で Richards 単著の独習本(do-it-yourself book) *The Pocket Book of Basic English* (1945)に基づき意味的連続性(semantic sequency)を単発的ではなく段階式(graded)でその流れを提示するとともに、本格的に直接(direct)法で「実践」できれば Basic 力はもとより英語そのものが母語話者 Ogden / Richards 並みということになる。

EP 本 I・II でたとえば It is a beautiful day. (良い天気である) と独白では言えても対人関係で“良い天気ですね”の意味では使えない理屈となるが、とにかく実践以前にこの言語思想の「EP 本への投射法」を科学的に根っから見定める必要がある。入口 (way in)から出口 (way out)までを鳥瞰したいのである。陸上競技の三段跳び(triple-jump)なら Hop, Step and Jump の Hop から Jump で目標定位置に着地したい。

Basic そのものに関しては特に中身のある内容のことを言うとき一般の English よりはるかに楽だと徐々に思えてくるのであるが、これは Basic が ‘all the key words of all thoughts’ で「概念規定」が明確だからである。その概念規定に関しての理論的追究に関心を抱かされる。数学での定理・公式の発見と結びつくが、この定式化を用いれば問題は解けるはずだし、解けるようにできているのが科学としての数学である。

今回は試問形式で扱う。語彙力、語法力、テキスト文パターン認知力が関わる。

A poll should be done (①) which is the more dishonest and deceitful newspaper, the Failing New York Times or the Amazon (lobbyist) Washington Post ! They are both a disgrace (②) our Country, the Enemy (③) the People, but I just can't seem to figure (④) which is worse.

The good news is that at the end of 6 years, after America has been made GREAT again and I leave a beautiful White House (do you think the people would demand that I stay longer ? KEEP AMERICA GREAT), both of these horrible papers will quickly go out of business & be forever gone ! (June 16, 2019)

試問

- 1) 第1段落中の①～④に入る空間詞は of, on, out, to のうちどれか。
- 2) 第1段落中の下線語 deceitful と同系で、r の文字で始まる Basic 語は？
- 3) **誤文訂正**：第2段落中に誤りが1つある。それはどこで、どう正すか。
(誤) → (正)
- 4) 第2段落下線の Basic 語 again と同系で EP 本には提示されない Basic 語は？
- 5) 第2段落下線の Basic 語 house と同系でない1語は次のうちどれか？〔太字体は Basic 語、イタリック体はプラス α Basic 語、標準体は un-Basic 語〕
a) hall b) **have** c) *hell* d) **hollow** e) *husband*
- 6) 第2段落波線の Basic 語 longer、その同系語 longing (憧れ、願望) の音声を音声記号〔IPA: International Phonetic Alphabet でよい〕でそれぞれ示せば？

・ longer [] ・ longing []

7) 第2段落中の下線の Basic 語 quickly (< quick) の原義に関連し、次の(a) ~ (c) の語句・文の意味をそれぞれ日本語で言い表せば？

- a) the quick of a fingernail (toenail) b) the quick and the dead
c) That's a quick dog !

8) 第2段落文の pattern を MSOE/ASMOE モデル上で動的・立体的に示せば？

▲ (ヒント) : 「ダメな New York Times 紙とアマゾンロビイストの Washington Post 紙のどちらがさらに誠実さがなく人をだまそうとする新聞か投票をしてみるとよい！どちらも国のためには恥さらしで、民衆にとっては敵(bad)だ、幸い良い(good)ニュースとしては6年後(2019年6月からみた6年後)に米国が再び偉大になり、私が美しい White House を去ったあと (KAG で民衆はもっというて欲しいと言うかもしれないが)、この酷い2つの新聞社は倒産し永久に消え去るだろう！」という内容。

- 1) ① poll (投票) の root sense (原義) は「家畜の頭数」で「触覚的に触ってつかみ取ること」、②disgrace と国との対比関係、③ enemy と people との所有関係、④事柄を展開図にして「開いて見てみること」のようにそれぞれ考えればよい。
- 2) deceitful {de + ceit + ful} は ceit の部分の音形 [sí:t] と語形から、ほぼ瞬間に同系の Basic 語を察知したい〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(2)参照〕。
- 3) この世のモノはわれわれの主観的な見方により時々で変化もするが、モノ自体は客観的・不変的に存在もする。Ogden-Richards の「意味の三角形」とも関わる。
- 4) 本連載(15)の(1)などで扱った。「ぐいぐいと向かい合うこと」が原義の Basic 語。
- 5) 5語のうち4語はすべて「覆い隠すこと、保護するために囲むこと」が原義。
- 6) long, longer, longest, longing など語中の [ŋ], [ŋg], [ŋɪŋ] 音には要注意。語は音声記号でも書き起こせる必要があり、これが手早く要領がよい〔言語音声は空気振動としての物理学的な phonetics (音声学) とは別に、structural linguistics (構造主義言語学) での phonemics (音素論) で初めて理解できることとなる〕。
- 7) **quick** の root sense は「速いこと」ではなく「生きていること、生气・活気のあること」、さらに「感情的・神経的に感じやすいこと」である〔同上拙著、第二部、例(105)参照〕。なお、プラス α Basic 語 *whisk(e)y* (ウイスキー) も同系。
a) quick の名詞を C.K. Ogden 監修 GBED : *The General Basic English Dictionary* (1940) は 'part of body under nails or skin readily feeling pain' と定義するが、「爪の下部や皮膚で痛みに敏感な部分」のこと。b) quick は今日の living ではある。c) は類推で考える。母語話者にはすぐ理解される。
- 8) 10層となる文層(10 sentence strata)で output される文と考えればよい。

.....
[正解] 1) ① on ② to ③ of ④ out 2) receipt cf. deceitful (受け入れられない → 欺く、だます) 3) (誤) a beautiful White House → (正) the beautiful White House cf. It is a beautiful moon tonight. (今夜の月は美しい) 4) against [again と against はこれだけ音形も語形も似ていて同系でないはずはない、本連載(15)の(1)など参照] 5) b) have cf. e) の *husband* は <house : 家 + band : 結びつけること> 6) longer [laŋ'gɔ] (ə は米音)、longing [laŋ'ɪŋ] (la は他の表記法もあるが、ŋg, ŋɪŋ の部分に要注視) cf. long [laŋ], longest [laŋ'gɪst], hang [háŋ], hanger [háŋgɔ], hanging [háŋɪŋ], etc. 硬音の [g] か軟音の [ŋ] かに要注視となる。7) a) 手指(足指)の爪の下の生身(皮膚) b) 生者と死者 c) あれはワンワン吠え元気な犬だ！

8) 正解 (横方向に電光掲示板風に流れ、縦方向に回転する円筒仕掛け装置をイメージ化すればよい)。

STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N ₁	COP/V	N ₂ /N ₃ /A	ADV
1	φ	The good news	is (/)	φ	φ
2	that	φ	φ	φ	at the end of 6 years,
3	after	America	has been made	GREAT	again
4	and	I	leave	the beautiful White House	φ
5	φ	(you [∞])	do think	φ	φ
6	φ	the people	would demand	φ	φ
7	that	I	stay	φ	longer ?
8	φ	φ	KEEP	AMERICA GREAT), /	φ
9	φ	both of these horrible papers	will quickly go	out of business	φ
10	&	φ	be forever gone ! //	φ	φ

＜備考＞ 単一斜線 (／) はこの文の意味的 2 分割線。 “A map is not the territory it represents.” 「地図は現地ではない」 で知られる A. Korzybski 風には N₁ が図 (figure) で N₂, N₃, A が地 (ground)。

pattern は concept (抽象概念) であり、前々回(52)で言ったように実際には目には見えない不可視の system (体系) であるが、STR 5～8 は挿入文として表層構造に実現する。ここで一呼吸が入ることとなる。全体で 10 層を成し理解法上で負荷はかかる。

次に前回見た物品の motion event (移動事象) である商取引の例での C. J. Fillmore 提唱の Frame Semantics (フレーム意味論) に関連し、移動事象フレーム＜SOURCE (起点)・PATH (経路)・GOAL (着点)＞(from S through P to G)が透明な表層文で具現する例を言語と人間社会の歴史を説く EP 本 III から地図とともに出しておく。

Thirty years after Columbus discovered America, the ship of Magellan, a sailor of Portugal, was the first to make its way south of South America, and on round the world through the Indian Ocean and past the Cape of Good Hope back to Europe. Magellan himself died on one of the Philippine Islands on April 27 (in) 1521. — (EP III, p.103)

He was here.



cf. (縮約 Basic 文への変換例)

Magellan and his men were here in 1519. Magellan himself came to his death on the way (in a war in the Philippines), but his ship came back to the same place (Spain) in 1522.

〔同上拙著、第三部(pp.191-192)参照〕

地図は一部手を施した形で示した。Columbus のアメリカ大陸発見 30 年後にポルトガル人 Magellan が試みようとした世界一周航海で、彼自身は途中のフィリピンで死亡したが、部下が船で出発港のスペインに帰着し世界一周を成し遂げた (1522 年)。

上での原文を和訳し、その後に原文英語への復元を試み対照するとよい。本連載前々回(52)の(1)で言った秘技の「復文式和文英訳」で要領よくその英語を $1 + 1 = 3 \sim 10$ とし根っから自分のものにしてしまうのである（上で例示した縮約 Basic 文とは別に、多種多様な元の Basic 原文例からの「復文式和文 Basic 訳」の手法もある）。

この文を prosodic phonology（韻律音韻論）の一端として本連載でたびたび見ている弱音系と強音系の 2 拍子で示してみる。強音系語句の縦読みでほぼ意味は分かろう。

語の弱音・強音で感知する英音の心的2拍子リズム(mental prosody)

(弱音系)	(強音系)
φ	Thirty years after Columbus
φ	discovered America,
the	ship
of	Magellan,
a	sailor
of	Portugal,
was the	first
to	make
its	way south
of	South America,
and	on round
the	world through
the	Indian Ocean
and	past
the	Cape of Good Hope back
to	Europe.

word stress（語強勢）、tone nucleus（音調核）、intonation（声の抑揚）など empathy（感情移入）の問題は自然と身につく。執拗に理屈を説くとかえって混乱を招くので要注意。本連載でたびたび触れているが、syntax（統語論）的にも M. Halliday などによる discourse（談話文）での thematization（テーマ化）などの問題が絡んでいる。

弱音系の語は強音系の nominative（N：名詞・名詞相当語句）と共起しその関係性を示すが、そもそもすべての N は SP (spatial particle：空間詞)を深層にもっているという N. Chomsky 風の見方からすればこの世の多数の存在性(existence)はすべて関係性(relation)という点で結びつく。C. J. Fillmore 風には強音系の N はフレームに基づき predicate verb（PV：述語動詞）からの喚起(evocation)ということになる。

英語における有限個の SP は無限個の N を形容詞 A または副詞 ADV に変異させるが、弱音系の SP は元来が演算子(operator)であり強音系との関係は関数 $f(x)$ の導関数 $dy/dx = \lim(\Delta x \rightarrow 0) \Delta y / \Delta x$ を求めること、すなわち $f(x)$ の微分係数(derivative)を求めることとなりうる。ここでは「存在性 e 」を縦軸、「関係性 r 」を横軸で定式化となる。

このあたりは semiotic（記号学的）な文化としてのモード・ファッション言語の体系では変異項(variant)とも結びつこう〔本会 Year Book (2022), No. 74 拙稿参照〕。

なお、*The Meaning of Meaning* には意味解釈で differential equations（微分方程式）に言及する箇所（2 箇所）がある〔p. 55, p.75 (10th edition(1952)) 参照〕。

